

演題番号 : 23

演題名 : jaw chattering がみられた特発性振戦症候群の犬の 1 例

発表者氏名 : ○佐藤泰紀¹⁾、小松 亮¹⁾、小松奈津貴¹⁾、坂 由希¹⁾、陶器有里花¹⁾、
松井琢真¹⁾、白石 圭¹⁾、矢谷仁人¹⁾、中田浩平²⁾

発表者所属 : 1) あきたこまつ動物病院・秋田県、2) 岩大

1. はじめに：特発性振戦症候群(全身性振戦症候群)は原因不明の全身の振戦を示す疾患である。本疾患は白色犬種に多くみられるとされてきたが、近年では白色犬種以外でも報告されている。症状は細かい振戦が数日の間に進行し、興奮、緊張などで悪化し、睡眠時には減弱する。振戦以外には威嚇瞬目反応の消失や眼振などが認められることもある。一般的には体幹や四肢の振戦が主症状であることが多いが、今回 jaw chattering（顎がガチガチする症状）を主症状とする症例に遭遇したため、その概要を報告する。

2. 症例：雑種犬、1 歳 7 ヶ月齢、雌。2～3 日前から痙攣しているという主訴で来院した。顎、眼瞼の痙攣様症状、顔面の筋肉の引きつり、前肢のつっぱり等が認められた。意識状態は清明であった。血液検査、X 線検査、超音波検査では著変は認められなかった。

3. 診断、治療および経過：初診時の症状からてんかん発作、破傷風等を疑いメトロニダゾール、ジアゼパム、ゾニサミドの投与を行なったが改善は認められなかった。その後垂直眼振、測定過大が出現し、前肢のつっぱりは改善した。また興

奮時に症状が悪化し、安静時には改善していたことから jaw chattering を伴う特発性振戦症候群を疑い、MRI 検査、CSF 検査を提案したが、その時点での検査を希望されなかったため、プレドニゾロン 2.2mg/kg/SID の投与を開始した。プレドニゾロン投与 2 週間後には症状は大きく改善し、興奮時の jaw chattering が残るのみとなった。その後 MRI 検査を希望されたため、岩手大学動物病院にて MRI 検査、CSF 検査を実施したが著変は認められなかったため、特発性振戦症候群として治療を継続。現在は全ての薬を休薬しているが、興奮時に軽度の振戦が認められるのみでコントロール出来ている。

4. 考察：特発性振戦症候群の症例において jaw chattering は比較的稀な症状であり、てんかん発作等との鑑別が重要である。特発性振戦症候群は治療反応の良い予後良好な疾患であることから、種々の検査結果から早期診断、治療を行うことが重要であると考えられた。また今回は行っていないが、可能であれば脳波検査を実施することができればてんかん発作との鑑別に有用であると考えられた。